

埼玉アーツシアター通信

SAITAMA
ARTS THEATER
PRESS
VOL.77

2018.10-11

ヘンリー五世
ヤエル・ロネン
イスラエル・ガルバン
アレクセイ・ゲラシメス
バッハ・コレギウム・ジャパン



眼鏡
Tribute to 蜷川幸雄

4

森新太郎

アジアの旅で
思いがけず発見した
先輩演出家の（強さ）



もり・しんたろう
1976年生まれ。演劇集団
円演出部。近年の演出作
に『ビッグ・フェラー』、『クレ
シダ』、ミュージカル『パレー
ド』など。11月『The Silver
Tassie 銀杯』を演出予定。
来年2月「森新太郎 チェーホ
フ・シリーズ」の第一弾として、
『プラトーフ』を手がける。

取材・文 ● 川添史子

大胆なアイデアと緻密に構築された演技——気鋭の演出家として活躍する森新太郎さんは、蜷川さんの稽古場を見学したことがあるそうだ。「劇団の先輩・立石涼子さんが蜷川作品の常連だった関係で、『冬眠する熊に添い寝してごらん』の稽古を見せてもらったんです。『真ん中に座りなよ！』と気を遣ってくださって恐縮しましたね。蜷川さんのエピソードはあらゆる人から伺いますし、出会った人の数と行動力に驚きます」と語る。

初蜷川作品は、芝居を始めたばかりの大学時代に観た『夏の夜の夢』。白い砂と、地面の下から現れる妖精で知られる演出作だ。

「実は僕が『夏の夜の夢』を演出した時も、迷いなくバックを地中から出したんです。全く気づかなかったけど、完全に蜷川さんの影響でしょうね。刷り込みって恐ろしいです（笑）」

印象に残る舞台は、彩の国シェイクスピア・シリーズ『ヘンリー四世』と語る。

「演出家はどうしても分析が入るので、滅多に人の作品に心が動かないけど、あの舞台は感動しました。特に最後、フォルスタッフが後ろに引きずられ、ハル王子との立場の差が際立つ場面は印象的。同じ釜の飯を食っていた仲間との別離が胸に迫りましたし、僕自身『権力者の孤独。に興味を惹かれることもあって、強く記憶に残っています」



『夏の夜の夢』妖精バック林永彪（左）とオーベロン蜷川哲朗 Photo◎高嶋ちぐさ

蜷川さんに育てられた俳優との出会いが続く。「『イニシュマン島のビリー』で一緒に鈴木杏さんは、声、身体、芝居の勘、どれも素晴らしく、稽古していて本当に楽しかったんです。『よくぞこの舞台女優を育ててくれた！』と、蜷川さんの恩恵にあずかった感覚がありました。（来年2月上演の）『プラトーフ』で一緒にする藤原竜也さんの肩越しにも、蜷川さんを見るんだろうと思います」

今年2月からの半年間、文化庁新進芸術家海外研修派遣制度によりシンガポールに留学した経験は、先輩演劇人たちの思いを知る機会にもなったと話す。

「東南アジア各地で、かつての日本のように古典芸能が現役で受け入れられているのを目の当たりにしました。蜷川さんがふんだんに取り入れた芸能的な猥雑さやケレンは、西洋の表現に対して『俺たちの舞台はそれじゃない』と踏ん張った結果だと思いますが、そこには生きた芸能が存在した時代を知る『実感。もあるんだと胸に落ちた。自分のアイデンティティーを信じることが出来る強さは、正直、羨ましいです」

蜷川さんは常に自分の演劇を「西洋演劇の補完物じゃない」と語っていた。足場を探す旅を経た若き演出家の、今後の展開が楽しみだ。

第7回 近藤良平と障害者ダンスチーム「ハンドルズ」による公演
『今はただ たまって見てて ほしいのよ』
11.10(土) 15:00開演 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール
詳細はP21



CONTENTS

4 PLAY > 彩の国シェイクスピア・シリーズ 第34弾
『ヘンリー五世』

6 PLAY > さいたまネクスト・シアター
世界最前線の演劇2
『第三世代』[ドイツ／イスラエル]

8 DANCE > イスラエル・ガルバン
『LA EDAD DE ORO—黄金時代』

10 DANCE > バンガラ・ダンス・シアター
『Spirit 2018』『I.B.I.S』

12 DANCE > Opto
『optofile_touch』

14 MUSIC > アレクセイ・ゲラシメス
パーカッション・リサイタル

16 MUSIC > バッハ・コレギウム・ジャパン
J. S. バッハ《クリスマス・オラトリオ》全曲

18 EVENT > 彩の国シェイクスピア講座Vol.2『ヘンリー五世』徹底勉強会
彩の国さいたま芸術劇場「劇場体験ツアー」

19 REVIEW

20 イベントカレンダー／チケットインフォメーション／彩の国シネマスタジオ

23 INFORMATION

24 COLUMN > 林家彦いちの『一歩外へ』

編集◎川添史子、榎原律子 表紙画◎波多野光 デザイン◎GOAT

©公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団 Published on 1. Oct. 2018 All Rights Reserved by Saitama Arts Foundation
※掲載情報は、2018年9月15日現在のものです。公演は追加および一部変更される場合がありますので、ご了承ください。

彩の国シェイクスピア・シリーズ 第34弾

『ヘンリー五世』

松岡和子 (翻訳)

Interview

多面的な王、ヘンリー五世

吉田鋼太郎が芸術監督に就任し昨年再開した彩の国シェイクスピア・シリーズ。続く作品は、5年前に蜷川幸雄演出で上演された『ヘンリー四世』の“その後”を描いた続編『ヘンリー五世』だ。ハル王子の栄光を描く歴史劇の見どころを、翻訳者に聞く。

取材・文 ● 市川安紀 (演劇ライター)

シェイクスピアの歴史劇に日本人がどうも食いつきづらいのは、「よその国の歴史なんぞ知らんわ」ということに尽きる。“英国史に輝く名君ヘンリー五世”と言われてもピンと来ないのは当然で、2013年に登場した当シリーズ第27弾『ヘンリー四世』の続編であることが手がかりだ。前作で遊び仲間のフォルスタッフをバッサリ切り捨て、王たる者として覚醒したハル王子が、今回の主人公ヘンリー五世その人。即位後すぐフランス遠征で勝利し、国民にも大人気の偉大な王になっていく……のは史実通りだが、単なる武勇伝ものにならないところがシェイクスピアの凄さ。「実際に訳してみても、今日的な問題が詰まっていることがよく分かりました」と、松岡氏は声を弾ませる。

「フランス遠征のためにヘンリー五世が率いた軍はイングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド兵の、良く言えば連合、悪く言えば寄せ集めで、“国内の抵抗勢力は海外遠征に送り出せ。国外の戦いに従事していれば過去の記憶は失せるものだ」という父

ヘンリー四世の遺言を実行しているんですよ。国内の不満を抑えるために外敵を見つけて叩くという政略は今の世界でもあちこちで見られますよね。ヘンリー五世の名の下に集まっているけれど、実は国内も火種だらけ。特にイングランドに見下されているアイルランドは日本で言えば薩長に睨まれた戊辰戦争の会津のようなもので、今に繋がる縮図になっている。そこにこの作品の普遍性があるんです。劇中では方言も飛び交うので、アイルランド人は会津弁にしようかな、と試行錯誤しています」

松坂桃李にご用心？

史実や先行作品に材を採りながら自由に筆を走らせて血湧き肉躍るドラマに仕立てるのがシェイクスピアの真骨頂。ヘンリー五世の人物像も“優れた軍人にして立派な人格者の英雄”然とはしておらず、フランス皇太子におちょくられてキレたり、捕虜を皆殺しにしたり、戦争で兵士や国民が傷ついても「王に責任はない」と言い放つ。「彼の冷酷無比な一面もシェイクスピアは

ちゃんと押さえていて、欠点のない完璧な名君ではないから面白いんですよ。捕虜殺しは当時の軍法に反することだし、“王に戦争責任はない”なんて詭弁ですよ。裏切り者は許さないという激しさもある。多面的でダークサイドもあるキャラクターに描かれているんです。爽やかな松坂桃李さんに感わされてはいけません(笑)」

観客としては『ヘンリー四世』でハルを演じた松坂がそのままヘンリー五世を演じることで、俳優とキャラクターを重ねながらその変貌を確かめる楽しみもある。ち

STORY

父王の死とともに王位についたハル王子は、ついにフランスへの遠征を決意。劣勢だったアジンコート戦の戦いでも勝利し、講和条約に調印するとともに、フランス王の娘キャサリンとも結ばれる。英仏の和平が実現し、ヘンリーはフランス王位の継承者であることを宣言する。

松坂桃李演じるハル王子改めイングランド王ヘンリー五世の活躍を中心に、戦いに臨む英仏両国の民衆や貴族、軍人たちの姿を群像劇として描く本作。今回、吉田鋼太郎は各幕で観客を物語へ誘う説明役(コーラス)を演じる。王を戦いへ駆り立てるフランス皇太子役には溝端淳平、その父フランス王役には横田栄司、無頼漢のピストル役にシリーズ初参加の中河内雅貴、騎士フルエリンに河内大和など、個性豊かな俳優陣が集結！

チケット発売日 一般 11.17(土) メンバーズ 11.10(土)

彩の国シェイクスピア・シリーズ 第34弾
『ヘンリー五世』

2019年 2.8(金)～24(日)〈全19回〉 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
[作]W.シェイクスピア [翻訳]松岡和子
[演出]吉田鋼太郎(彩の国シェイクスピア・シリーズ芸術監督)
[出演]松坂桃李

吉田鋼太郎、溝端淳平、横田栄司、中河内雅貴、河内大和 ほか

チケット(税込) 一般 S席9,500円 A席7,500円 B席5,500円／U-25*(B席対象)2,000円
メンバーズ S席8,600円 A席6,800円 B席5,000円

※メンバーズには別途ご案内するプレオーダー(抽選)があります(10月中旬予定)。

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。



第27弾『ヘンリー四世』(2013年4月 彩の国さいたま芸術劇場)
Photo © 渡部孝弘

回違った難しさに直面するので、ウンウン唸られますけど(笑)」

今回コーラス役は、演出を担う吉田が務める。最近の上演では、コーラスのセリフをいくつかに割り、複数の俳優が演じる演出もあるが、吉田が一人で演じるからこそ新鮮さがあると松岡氏は期待を寄せる。

「複数の役者が演じることで世界の多様さや市井の人々を代弁させる面もありますが、つまりは一人でやり切れる技量を持つ役者がそうはいないんです。鋼太郎さんだからこそできる挑戦ですよ。名ゼリフもあるので、ぜひ耳を傾けていただきたいですね」

蜷川幸雄のスピリットを受け継ぎつつ、人間ドラマのダイナミズムを前面に押し出した芸術監督就任第一作『アテネのタイモン』で快調なスタートを切った吉田の演出手腕にも熱視線が向けられるところだ。「前回、“演出家・吉田鋼太郎”には驚かされました。大胆に原作を切り貼りする点は蜷川さんにはない鋼太郎さんらしさですし、今回もどう料理してくれるか楽しみです」

がぜん、開幕が待ち遠しくなってきた。

作品を司る“コーラス”

なみに前作で吉田鋼太郎が演じたフォルスタッフは、残念ながらこの戯曲には登場せず。会話の中で寂しい最期が語られるのみだ。フォルスタッフの愉快的仲間たちも、軒並み悲惨な末路を迎える。ああ無情……。飛ぶ鳥を落とす若き為政者と滅びゆく者との、残酷なまでの対比にも思いを馳せたい。

「『ヘンリー四世』の最後にハルが拒絶して見限った人たちが、『ヘンリー五世』ではとうとう誰もいなくなる。連続した物語として眺めるとその流れが見えてきます」

また、全5幕の冒頭にもれなくコーラス(説明役)が登場するのも本作の特徴だ。「シェイクスピアは政治や軍事的な武(ぶ)張(は)ったシーンでは同じ文体を繰り返し、きっちりしたフォルムにしています。一方でコーラスは、観客が状況を想像しやすいように言葉がとても平明で力強く、訳していても気持ちよかったですね。この文体の使い分けは、シェイクスピアのチャレンジの一つだと思います。その分、翻訳者としては毎

さいたまネクスト・シアター 世界最前線の演劇2 『第三世代』[ドイツ/イスラエル]



ヤエル・ロネン

Yael Ronen Interview

さいたまネクスト・シアターが新たに挑む『第三世代』。
この作品を書いたのが、ヨーロッパで人気沸騰中のヤエル・ロネンだ。
7月の来日中に、同作日本版のクリエイションへの期待を聞いた。

取材・文 ● 今村麻子（演劇ライター） Photo ● 片山貴博

——『第三世代』はドイツ、イスラエル、パレスチナの3カ国の国籍を持った登場人物で展開します。実際に3カ国の国籍を持つ俳優と作品を作ったそうですね。ユダヤ人の大量虐殺や強制収容所の話や紛争の話など、それぞれが語るのは辛いことのように思いますが、どのように引き出して作品にしていったのでしょうか。

ロネン お互いを信用し、安心して語り合える環境に身を置くことが大事なので、合宿しながら作品を作りました。出演者はみんなユダヤ人の大量虐殺などの当事者から三世目なので、過去の悲惨な出来事と距離があります。彼らが体験した現実というよりは、祖父母から聞いた戦争体験などを通して、今起きている政治的な混乱を語り合っていく。自分自身のトラウマ体験を語り合うのではなく距離がある問題なので、ブラックジョークも生まれました。

——この作品を作るきっかけはどこにありましたか。

ロネン 初演当時、最も興味がある問題を作品にしました。問題を探求するためには、どうすべきか。複雑なテーマであればあるほど「演劇」を使うと効果的に深められる。初演から10年が経ちますが、状況は今とあまり変わっていません。変わらないということは、作品で扱うイスラエル・パレスチナ問題が10年の時を経ても進展していないということでもある。悲しい現実です。とはいえ、この10年で世界からこの問題への見方が変わってきたことは大きい。世情は刻一刻と変化しています。

——再演があるたびに反響があるこの作品の特徴はどこにあると思いますか。

ロネン 上演する場所と目の前で起こっている現実に関心になって変化していくのが『第三世代』の特徴です。つまり、自分たちの現実における問題を語るため、メタファーとして作品がある。『第三世代』を日本で上演するということは、日本とその隣国の諸問題について考えることになると思います。

——演出の中津留さんは6年前のリーディング公演で戯曲を読み解くとき「皮肉で言っている文脈か」「ジョークなのか」「ヤエルさんのシンプルな思いなのか」を常に考えていたそうです。

ロネン 日本のお客さんに受け入れてもらうためには、日本のやり方を探ってもらうしかないですね。笑いにするか真面目に

受け取ってもらうかの二択だとしたら、わたしは絶対に面白い方をとりたい。観客に笑ってもらうため、ユーモアを大事にしたから。皮肉は、ないと成立しない文脈が多々あるので、そこはカットできないと思う。わたしから何か提案するとすれば、日本という国の文脈の中で、ブラックジョークを交えてユーモラスを目指すやり方になるのかなと思います。元の戯曲が日本の観客にとって、何を参照しているかわからないジョークはカットしてしまっても作品の本質は損なわれないと思います。

——ヤエルさんが日本にいらっしゃるのは6年ぶり。『第三世代』のリーディング公演以来です。日本での滞在中、作品作りへのインスピレーションを得ることや発見がありましたか。

ロネン 今こうして過ごしている時間やオフィスで働く人を観察することも、後からヒントになるかもしれません。何が作品のヒントになるかは今の自分にはわかりませんが、日本の文化と人々をもっと知りたいという気持ちでいっぱいです。日本には面白いところがたくさんありますね。前は猫カフェに行きましたが、今回はフクロウカフェに行き、とても楽しかったです。原宿に行ったら、かわいい古着もたくさん売っていて、欲しくなりましたが浪費しないように気をつけました。20代だったら、全部買っていたかもしれません(笑)。日本人の動くリズムやスピードは独特ですね。道を歩いているときも、すれ違

う人に気を遣っているところも好き。ロンドンやニューヨークだと地下鉄に乗ろうとすると駆け込み乗車をする人やホームで走り回っている人がいて、それだけでストレスだし、イスラエルでは紛争が頻繁に起きています。日本はそういう恐怖は少ないので、過ごしやすいです。

——ヤエルさんは国籍をこえて活動されていますね。日本人の俳優やスタッフと一緒に作品作りをするのに興味はありますか。

ロネン もちろん！なぜ日本人はわたしの作品に興味を持って紹介してくれるのか、とても知りたい。日本は進歩的な国でありながら、とても伝統を重んじる国だと思う。そういう日本だからこそ、語られないで眠っている過去の物語もたくさんあるはず。わたしとまったく異なる感覚の人たちで集まったら、新たな物語が生み出されると思うので、日本の皆さんと語り合う機会があると嬉しいです。

——ヤエルさんご自身にも変化が生まれそうですね。

ロネン 中東の人たちは、自分たちはヨーロッパの一部に住んでいて、ヨーロッパが世界の中心という感覚でいます。アジアに来てみると、こっちに世界の大半の人が住んでいて、わたしたちが暮らしている場所は、世界の中心ではなかったということ。身をもって体験することになる。新たな出会いから生まれる作品も、きっとこれまで味わったことのない感覚を体験することになると思います。

チケット販売中

さいたまネクスト・シアター
世界最前線の演劇2
『第三世代』[ドイツ/イスラエル]

11.8(木)～18(日)
彩の国さいたま芸術劇場 NINAGAWA STUDIO

【作】ヤエル・ロネン&ザ・カンパニー

【翻訳】新野守広 【演出】中津留章仁

【出演】さいたまネクスト・シアター

周本絵梨香 手打隆盛 松田慎也 内田健司 横木淳平

阿部 輝 井上夕貴 佐藤 瑠 高橋英希 / 清瀬ひかり(劇団青年座)

チケット(税込) 全席自由(整理番号付) 一般 3,000円

U-25* 2,000円 メンバーズ 2,700円

11. 8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
14:00	●	●	●	休	●	●	●	●	●	●
19:00	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

※日本語上演

※開場は開演の20分前です。

※開場時間よりチケットに記載されている整理番号順のご入場となります。

※開場時間を過ぎますと整理番号は無効になります。

※特設劇場での上演のため、椅子の形状が通常と異なります。

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。



周本絵梨香

手打隆盛

松田慎也

内田健司

横木淳平



阿部 輝



井上夕貴



佐藤 瑠



高橋英希



清瀬ひかり
(劇団青年座)

世界最前線の演劇

今年6月、『ジハード - Jihad -』で始まった彩の国さいたま芸術劇場の新たな取り組み。現在の変わりゆく国際情勢の中、世界では諸問題を抱える地域の現状を背景にした戯曲が多数生み出されている。そんな作品を同劇場の若手演劇集団「さいたまネクスト・シアター」が上演。ニュースでは届けられない人々の姿を舞台上に映し出す。

破天荒、アバンギャルド、 稀代の天才、 そしてフラメンコ舞踊のピカソ

イスラエル・ガルバン 『LA EDAD DE ORO－黄金時代』

文●東 敬子 (フラメンコ・ジャーナリスト) Photo●Félix Vázquez

近年のダンス界では、コンテンポラリーにヒップホップを混ぜてみたり、ボールルームダンスにアクロバットの要素をふんだんに取り入れたり、ジャンルを超えたクロスオーバーなスタイルが盛んだが、フラメンコ舞踊にその波が来たのは意外に早く、1990年代後半の事。そしてその波を大きく動かしたのが当時まだ20代半ばのイスラエル・ガルバンだった。

彼の名は日本ではまだ余り知られていないが、フラメンコ界においてその名が意味するものは「破天荒」、「アバンギャルド」、そして「稀代の天才」。しかし私はそこにもう一つ名前を加えたい——彼は「フラメンコ舞踊のピカソ」であると。

ダンスという概念さえ超えた、パフォーミング・アートの極み。彼のステージには、ピカソの絵画を見に行くように、心躍らせ

て足を運んで欲しい。ただ感動するためだけに、その世界を見詰めて欲しい。今回の来日で公演される『黄金時代』なら、それがきっと可能なはずだ。

イスラエルの踊りはまるでピカソが描いた『ゲルニカ』の様だ。スペインを代表する偉大な画家の、あの有名な絵画には、敵軍によって無残に爆破された街の嘆きと怒りが、行き場を失った粉々の心と体が、雑然と並べられている。そしてイスラエルも、心の中にふつふつと湧き上がる抑えきれない感情、言葉ですら表現できない非常に抽象的なそれを、動きで具象化しようと試みる。「なんだこりゃ!」「支離滅裂!」と叫びながら見る『ゲルニカ』の、鳥肌が立つような強烈な何かは、イスラエルの踊りそのもののなのだ。

突き進む前人未到の道！

しかし世間が「天才」を理解するのには、往々にして時間がかかるものだ。イスラエルもまた、理解して貰えない長い長い時間を過ごした。

1973年スペイン南部の町セビリアで、両親共に舞踊家の家に生まれ、子供の頃からフラメンコの伝統を叩き込まれて育った。持って生まれた踊り手としての資質は並を外れ、特にその類稀なるリズム感、現代フラメンコで一、二を争う程。しかし彼の両親のように、伝統派のリーダーとなって欲しいという周囲の期待をよそに、彼が行き着いたのは前人未到の道だった。

1994年21歳の時、20世紀を代表するフラメンコ舞踊家マリオ・マジャと出会い、

彼の自由な発想、人としての生き様に触れ、後にフラメンコ識者ベドロ・G・ロメロが参謀となり、彼はフラメンコの常識をくつがえす新しい世界へと旅立っていく。そして1998年25歳の時に発表した処女作『ミラ！ / ロス・サバトス・ロホス (見て！ / 赤い靴)』で、観客はそれを目の当たりにする。彼は伝統的なフラメンコ舞踊にはない、突拍子も無い動きを繰り出して人々を驚かせた。滑稽で、冗談ともつかない演出もあった。けれど彼は真面目だった。そして彼が作品を発表する度に、会場はブーイングの嵐に包まれた。

だが、その時は来た。ブレない鋼の意志で自身のアートを貫いた彼は、遂に勝利した。旅立ちから6年後の2004年、闘牛を

描いた『アレナ』は、その優れた創造性をもって数々の賞に輝いた。

黄金時代の到来！

機械音を使うなど、音楽的にも大きな実験が見られた『アレナ』から一転して、従来の伝統的なフラメンコ音楽と共に踊られた『黄金時代』は、伝統と革新という偉大なるミスマッチで、大きなセンセーションをまき起こした。そして2005年に制作されてから13年間、人々に愛され、上演され続けてきた。

カンテ、バイレ、ギター3人という、フラメンコにおいては最小のグループ構成で、飾りを全て捨て去った言わば裸のフラメンコは、彼のアートの本質をまざまざと見せつける。また、今では少なくなった、

チケット販売中

イスラエル・ガルバン

『LA EDAD DE ORO－黄金時代』

10.27(土)・28(日) 15:00

彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

[演出・振付] イスラエル・ガルバン

[出演] イスラエル・ガルバン、
ダビ・ラゴス(カンテ/歌)、アルフレド・ラゴス(ギター)

チケット(税込) 一般 前売 S席6,000円 A席4,000円

U-25* 前売 S席3,000円 A席2,000円

メンバーズ 前売 S席5,400円 A席3,600円

※当日券は各席種とも+500円

※A席(サイドバルコニー・2階席の一部)は舞台の一部が見えづらいお席です。

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

イスラエル・ガルバン

Israel Galván

スペイン・セビリア生まれ。複雑でスピーディーなフットワーク、卓越したリズム感、フラメンコの新たな世界を切り拓く独創性で知られる。著名な舞踊家の両親よりフラメンコを学び、幼い頃より舞台に立つ。1994年マリオ・マジャ率いるアンダル・サ・ダンス・カンパニーに入団。1998年には自身のカンパニーを創設。以来、カフカの『変身』を題材とした『ラ・メタモルフォシス』(2000年)をはじめ、既成概念を覆す革新的な作品を次々発表。『天才』『革命児』『アバンギャルド』等の賞賛を欲しいままにする。2005年『アレナ』でナショナル・ダンス賞をはじめ、2012年ベッシー賞(NY)、2016年第16回英国ナショナル・ダンス・アワードの特別賞(Special Award for Exceptional Artistry)など数々の賞を受賞。パリ市立劇場アソシエイト・アーティスト。日本では、『SOLO』『FLA.CO.MEN』をあいちトリエンナーレ2016で上演し話題となった。

構成だけを事前に決め、あとはほぼ即興で演じられるフリースタイル・フラメンコのライブ感を復活させ、何が飛び出すか分からないドキドキ感で観客を熱狂させる。

彼は20年の時をかけて自身の表現を探し当てたと同時に、観客の「感性のドア」を開いた。今ではブーイングはおろか、公演を行えばソールドアウトで、世界を股にかけての活躍を展開する人気ぶり。それと共に、フラメンコにおける新しいジャンルを確立し、ロシオ・モリーナら若きスターが彼に続いた。今や紛れもなく現代フラメンコの歴史の1ページを飾る巨匠となった彼は、ジャンルを超えた、21世紀のスペインを代表するアーティストの一人である。

今見なければ、消えてしまう刹那の美しさが、ステージにはある。あなたにもその一生に一度の瞬間を、体験して欲しい。



この瞬間も生きる 悠久の時間

バンガラ・ダンス・シアター 『Spirit 2018』『I.B.I.S』

6万年を超えて継承されてきたオーストラリア先住民の文化に、コンテンポラリー・ダンスを融合し、独自のダンス技法を生み出した「バンガラ・ダンス・シアター」が埼玉に初登場する！先住民のアイデンティティが力強く語られるダンス世界へ誘われよう。

文 ● 佐和田敬司（早稲田大学教授）

バンガラ・ダンス・シアターは、1989年にオーストラリアで創設されたダンスカンパニーである。オーストラリア先住民にダンスや音楽を教える教育機関NAISDA（1975年創設）のスタッフ、卒業生を母体としている。今日まで芸術監督を務めるスティーヴン・ページは、コンテンポラリー・ダンスのコレオグラファーを経て、1991年にバンガラに合流した。それ以来今日までバンガラは、オーストラリアを代表するダンスカンパニーとして、国内・海外で数多くの公演を行ってきた。

アイデンティティを語る芸術

日本においては、先住民の芸術（美術・音楽・映像・舞台）といえば、その「民族」がその土地で長い時間、変わることなく伝承・醸成してきたものと思われがちだ。伝統的な要素が西洋の手法で表現されると、「本物らしさ」を欠いていたり、西洋的な表現としても洗練されていないとして、「曖昧」



Photo © Tiffany Parker-HR

スティーヴン・ページ Stephen Page

バンガラ・ダンス・シアター芸術監督。ヌヌクル族、およびクイーンズランド州南東部に住むユガンベ氏族に属するムナルドジャリー族の子孫にあたる。1991年にバンガラ・ダンス・シアターの芸術監督に就任、以来、オーストラリアパフォーミング・アーツの金字塔となる作品を次々と発表している。2000年シドニーオリンピック開・閉会式における先住民場面の演出や、ゴールドコーストで開催された2018年英連邦競技大会（コモンウェルスゲーム）開会式において先住民による語りの手法を一新するという試みを新しい身体表現として紹介した。アボリジナルやトレス海峡諸島民の人々が自然と共存し神聖視する姿を描いている。



『Spirit 2018』 Photo © Jhiny Boy Borja

で「際物的」だとみなされることが多い。しかし、オーストラリアにおける先住民の芸術を理解するためには、この先入観をまずは取り払ってもらいたい。

先住民の芸術には、二つの流れがある。一つは、その土地で伝承され、時代とともに醸成された伝統的な表現だ。たとえば、奥地の生活用品の中に美を見い出された民芸品、継承されてきた儀礼にともなう歌や踊り、そして祖先から語り継がれてきた物語などである。もう一つは、西洋の手法など、伝統に根ざしていない表現方法を用いて自らの先住民としてのアイデンティティを語るものである。後者の表現の背景には、植民地化の過程の中で先住民の多くが、伝統的に深いつながりを持つ土地から強制的に移動させられたり、過酷な同化政策が強いられたことで、先住民言語や伝統文化から隔絶させられた歴史がある。この両者ともに、先住民の重要な表現である。

そしてバンガラの芸術は、そのどちらの流れにもまたがっていることが特色である。バンガラの芸術監督ページは、伝統から切り離された都会で生まれ育った先住民であり、西洋のダンスの踊り手でもあったが、伝統的舞踊が受け継がれる北部準州のアーネムランドにあるイルカラ地区からダンスと文化の両方を学びとった。バンガラの目的の一つは、ダンスを通して、伝統的な奥地と都会との間に関係性を結ぶこと。そして歴史的に伝統から切り離された先住民が、奥地で伝統に再び出会うことであ

る。バンガラのこのような先住民表現へのアプローチは世界の先住民アーティストにも大きな影響を与えており、彼らはバンガラで学び、その手法を各地で花開かせている。

先住民の伝える真実の物語

バンガラはダンスを通して、豪州各地の先住民の物語を語る。土地と先住民を結びつける物語を語れば語るほど、その土地を彼らから奪ってきた植民地主義の歴史をも浮かび上がらせ、ダンスは政治的なメッセージを発する。歴史上の人々の物語も、その中に含まれる。18世紀にアボリジナルとして初めて渡英したベネロング。19世紀タスマニアで、植民地総督夫妻の養女となり後に捨てられたアボリジナルの少女マシーナ。アボリジナルを代表する知性であり、先住民の神話・伝説を英語で書き記したユナイポン。これまでバンガラの舞台が語ってきたこのような人々の物語は、西洋との接触以降の先住民の歴史を伝え、抑圧に屈することなく生き残った事実を祝福し、先住民が持つ誇りを表現するのである。

これまでバンガラは、1995年に『Ochres』（東京国際舞台芸術フェスティバル）、2005年に『Bush』（愛知万博）などを、日本でも上演してきた。

今回の上演は、『Spirit 2018』『I.B.I.S』という対照的な二つの演目である。2004年に初演された『Spirit』はバンガラの基本的なコンセプトであるアーネムランド北東

チケット販売中

バンガラ・ダンス・シアター

『Spirit 2018』『I.B.I.S』

11.9(金)19:00、10(土)15:00

彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

〔演目・振付〕

『Spirit 2018』スティーヴン・ページ

『I.B.I.S』デボラ・ブラウン、ワアンゲンガ・ブランコ

〔出演〕バンガラ・ダンス・シアター

チケット(税込) 一般 前売 S席6,000円 A席4,000円

U-25* 前売 S席3,500円 A席2,000円

メンバーズ 前売 S席5,400円 A席3,600円

※A席(サイドバルコニー・2階席の一部)は舞台の一部が見えづらいお席です。

※当日券は各席種ともに+500円 ※一般・メンバーズS席料金に変更となりました。

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

バンガラ・ダンス・シアター日本公演 特設サイト
<http://www.bangarra-japan.com/>

部の伝統的な舞踊をフィーチャーしたダンスである。一方の『I.B.I.S』は、大陸に住むアボリジナルとは異なる先住民、トレス海峡諸島人*1の物語を伝える。この作品は、『I.B.I.S』*2という日用雑貨店を舞台にしているが、この『I.B.I.S』自体が、トレス海峡諸島人の持つ活気と独立精神の象徴であり、民族への祝福と呼べる物語を観る者に語りかける。前者の演目が悠久の時間（ドリーミング）を感じさせるのなら、後者は力強く今を生きる先住民の姿がダンスを通して活写される。そしてどちらも、先住民の伝える真実の物語であることに変わりがない。

「伝統」や「民族」に関して、ややもすると一面的な先入観に陥りがちな我々だが、バンガラの舞台を通して、過去から続く悠久の時間を今この瞬間も同時に生きるという「ドリーミング Dreaming」の概念を、ぜひ体感していただきたい。

※1 オーストラリアとパプアニューギニアの間にある17の島々と、大陸北端部に居住しているミラネシア系の人々。オーストラリアの先住民と言えは乾いた大地に暮らすアボリジナルのイメージが強いが、彼ら海の民も、同じくオーストラリアの先住民である。1930年代の州政府に対する一連の労働運動や、1990年代に国家と先住民の関係を重大な影響をもたらした先住権を最高裁が認めたマボ判決など、抑圧への抵抗と地位向上の運動に輝かしい歴史を記してきた。

※2 I.B.I.SはIsland Board for Industry and Servicesの略で、その歴史は1904年にトレス海峡諸島のマレー島で、地場産業である真珠貝採取のためのラガー船を購入して、地元民の経済活動を促進した組織を祖とする。この目的を維持しながら、I.B.I.Sは今日でも商店として彼らの日常生活と雇用を支え続けている。

——2012年にOpto^{オプト}を結成された経緯は？

渡辺 ネザーランド・ダンス・シアターで踊った自分たちがヨーロッパで経験したことを日本のお客様に見てもらいたくて立ち上げました。Optoとは光、光学的という意味で、ダンサーが踊るエネルギーの光を伝えたいと願って名付けました。

小尻 帰国しても僕たちが活動できる場がなかったんです。

湯浅 私は、桐生市市民文化会館で上演された第2回公演『optofile2』（2013年）から参加しました。

——Optoは渡辺さんの地元・群馬で活動されてきました。

渡辺 私の家がありますし古巣の山本禮子バレエ団のスタジオを使わせていただけます。クリエイティブ面で集中するには群馬がベストでした。

——群馬から発信することを意識していま

したか？

渡辺 群馬だけで終りたくないと思っていました。クオリティ重視なので、群馬でこつこつやっていく方が確実に浸透していけると考えていました。

——皆さんにとってOptoはどのような場所ですか？

小尻 僕は型にはめられるのが嫌で、型がありつつも崩したり危ういところを楽しんだりする性質です。二人はそれを見守ってくれます。

湯浅 この三人は何も言わなくても伝えられるし受け止められる。本当の家族のようです。呼んでくるダンサー・振付家も信頼できるので深いところで共有できます。

渡辺 お互いがまるっきり分からない状態ではないので安心できて、その上で影響し合える。だから舞台上で同じようなエネルギーを出せるのだと思います。

話題の振付家によるデュエット、挑戦的な新作

——『optofile_touch』の上演作品について伺います。クリスタル・パイトの『The Other You』（再演）は小尻さんも踊る男性デュエットで、音楽はベートーヴェンの「月光」です。パイトは英国ロイヤル・バレエ団やパリ・オペラ座バレエ団から委嘱される注目の振付家ですね。

小尻 パイトはコンセプトチュアルな作品でも最後は絶対にダンスで魅せるし、感情が物凄くダイレクトに伝わってきます。この作品でも踊っていて感情をえぐられます。見ているも踊っているも違う次元に誘われます。

——『NEP and BAT』（新作）は渡辺さんが踊るソロで、小尻さんが作曲家の小出稚子さんと協働して振付し、サクソフォン奏

者の大石将紀さんがライブ演奏します。

小尻 僕の思い描くレイさんのイメージを小出さんに伝え、そこから出てきたものを基に創っています。また食虫植物の中に小さなこうもりが寝ているという生態発見についての記事が頭に引っかかっていて、そのイメージも重ねています。レイさんは小動物っぽいし(笑)。大石くんが演奏するサクソフォンの形も食虫植物みたいなので、そこから構想を膨らませています。

——湯浅さんは自作自演の『media(仮)』（新作）を発表します。

湯浅 「自分の体ってなんなのだろう？」ということにフォーカスします。いろいろな方とお仕事すると、いつも全く違うことを要求されます。それに対して「自分の中にこういうものがあったんだ」と発見し消化して出すのは面白いですが、そのたびに全然違う人格がいます。でも、それは体と

いうツールがないと経験できません。

——ヴァツラフ・クネシュ振付『Recall』（再演）は男性二人、女性二人の四人で踊る作品です。

渡辺 この作品のエネルギーは物凄いので、そこを見ていただければ。とてもシンプルだからこそフィジカルを共有できるダンサーたちとやらないと成立しません。

ダンサーのエネルギーに「タッチ」してほしい

——今回は彩の国さいたま芸術劇場、愛知県芸術劇場と手を組みます。

湯浅 本当に感謝しています。私たちだけだったら展望を開くのが難しいです。

小尻 日本とヨーロッパは劇場文化の成り立ちが違います。公立劇場と協力し合っ

がっていったりするかもしれません。

渡辺 このような形で公演を打ち、お客様にダンスのクオリティを少しずつ伝えていく。それしかないと思います。

——Optoを通してダンスの魅力をどのように広げていきたいですか？

渡辺 お客様にはダンサーと空間から受ける何かを感じ取っていただければ。小ホール公演なので客席から近いですし、ダンサーのエネルギーを感じられると思います。

小尻 公演名にある「touch」には、Optoを知らない方々にも触れて欲しいという願いが込められています。

渡辺 触れることによって何か感じていた

だきたいです。



Photo©Ryu Endo

小尻健太
Kenta Kojiri

1999年ローザンヌ国際バレエコンクールにてプロフェッショナル・スカラーシップ賞受賞。モナコ公国モンテカルロバレエ団などを経て、イリ・キリアン率いるネザーランド・ダンス・シアターIに初の日本人男性として入団。自身の創作活動をはじめ、オペラやミュージカルの振付、フィギュアスケート日本代表選手の表現指導、新国立劇場バレエ研修所講師など国内外で多岐にわたって活躍。近年は、渡辺レイらとOptoを主宰するほか、千葉市・ヒューストン市 姉妹都市提携45周年記念バレエ公演の芸術監督および実行委員長、Dance Lab「ダンサー、言葉で踊る」のキュレーターを務める。

渡辺レイ

Rei Watanabe

群馬県太田市出身。ネザーランド・ダンス・シアターI、リヨンオペラ座バレエ団などに所属し20年間ヨーロッパを拠点に活躍。イリ・キリアン、オハッド・ナハリンなど多くの世界的振付家による作品を踊る。2000年マルティノ・ムラー振付『ロミオとジュリエット』のジュリエット役でベストダンサー賞を受賞。2012年日本を拠点にOptoを結成。Optoの活動と平行して、2017年Kバレエカンパニー公演にて熊川哲也氏と『Fruits de la passion』を共作共演。2018年Kバレエカンパニー公演にて『FLOW ROUTE』を振付。また、後進の育成にも力を入れ、芸術文化の研鑽に積極的に努めている。

湯浅永麻

Ema Yuasa

ネザーランド・ダンス・シアターI、IIに11年間所属後フリーとなり、マッツ・エック版『Juliet&Romeo』ジュリエット役、サシャ・ヴァルツ『Körper』等にゲスト出演。弦楽四重奏団Kronos Quartet、現代美術家/ピアニストの向井山朋子や、能楽師の安田登など多様なアーティストとコラボレーションし、振付家としても活動。渡辺レイ・小尻健太と共同でOptoを主宰、シディ・ラルビ・シェルカウイ率いるEASTMANにも所属し『PLUTO』等数々の作品を世界各国で公演する。建築家田根剛、デザイナー廣川玉枝とコラボレーションした『enchaine』も好評を博す。

チケット販売中

Opto『optofile_touch』

12.8(土)・9(日) 15:00 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

【演出】
『The Other You』クリスタル・パイト(演出・振付)
『Recall』ヴァツラフ・クネシュ(演出・振付)
『NEP and BAT』(新作)小尻健太(演出・振付)／小出稚子(作曲)
『media(仮)』(新作)湯浅永麻(演出・振付)
【出演】渡辺レイ、小尻健太、湯浅永麻、アンソニー・ロムルホ、フィリップ・スタニエック、大石将紀(サクソフォン奏者)

チケット(税込) 全席指定 一般 前売 4,500円 ※当日券は+500円
U-25*(1公演10枚限定) 3,000円

【主催】Opto 【共催】公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください

発光するダンス、エネルギーに触れるOpto『optofile_touch』

元ネザーランド・ダンス・シアターのダンサーで、現在も国際的に活躍する渡辺レイ、小尻健太、湯浅永麻を中心メンバーとした「Opto」は、世界的な振付家の作品を上演する稀有なダンス・プロジェクト。現在ヨーロッパで話題沸騰の振付家クリスタル・パイトによる作品など、全4作を贈るという贅沢なダンスオムニバスについて聞く。

取材・文 ● 高橋森彦(舞踊評論家) Photo ● 秋倉康介



Interview

アレクセイ・ゲラシメズ

打楽器の可能性は無限だ！ Alexej Gerassimez

クラシック、現代音楽、ジャズ、ダンスとのコラボレーション、とジャンルを超えた音楽を、超絶テクニックと豊かな音楽性で魅せるスーパー打楽器奏者アレクセイ・ゲラシメズがやってくる！打楽器の新しい世界を切り拓く圧倒的なパフォーマンスによるスリリングでエキサイティングなコンサートは絶対に聴き逃せない。初来日を前に、打楽器奏者としての信念、そして今回のリサイタルについて話をうかがった。

協力 ● 株式会社オカムラ&カンパニー 構成 ● 梶原律子 Photo ● Nikolaj Lund



天才パーカッショニストの 初リサイタルはディベアのために!?

——ゲラシメズさんがそもそも打楽器を始めたきっかけは？

音楽家の両親のもと、3人の兄妹全員が楽器を演奏する環境で育ったので、子どもの頃からずっと音楽が身近にありました。その中でも私は小さい頃から打楽器が好きで、打楽器奏者になりたかったんです！その夢は順調に進んでいます。4、5歳のときには、キッチンからフライパンや缶などを持ちだして、自分のディベアのために「打楽器コンサート」を開催したんですよ（笑）。

——演奏活動でターニング・ポイントになったことは何ですか。

12歳でケルン音楽大学の“若き音楽家”になったことです。年上の“本物”の学生と一緒に勉強することは素晴らしい経験で、自分の限界を越える後押しをしてくれました。そして、そこで私は自分の才能に気づいたのです。

——影響を受けた人・物はありますか。

子どもの頃はエヴェリン・グレニーさん、安倍圭子さん、そしてストンプ（身の回りの物を叩いて演奏する、ニューヨークのオフ・ブロードウェイのパフォーマンス）などから、音楽と表現の両面で強く影響を受

けました。また、SFや宇宙、自然への関心、そして読書からも多くのインスピレーションを得ています。私たちの周りにはたくさんの美しいものがありますが、それらは、ちょっと立ち止まり、耳を澄まして初めて気づくものもあります。こうしたことは、音楽だけでなく、私の考え方にも影響を及ぼしています。

大切なのは 思いを伝えるための音色

——ゲラシメズさんはさまざまなアーティストと共演していますが、これまでの活動で印象に残っているコンサートはどんなも

のがありますか。

昨年、作曲家タン・ドゥンの打楽器協奏曲《The Tears of Nature》を彼自身の指揮で何回か演奏しました。最後の公演会場はハンブルクにできて間もない、最高の音響で評判のコンサートホール「エルブ・フィルハーモニー」でした。作曲家とともにそのような素晴らしい音響のホールで共演でき、最高の機会になりました。

数ヶ月前にはベルリンで、振付家サシャ・ヴァルツと彼女のダンスグループと共演しました。純粋で熱いダンサーたちが私のドラムと完璧に融合した、めったにできない力強い体験でした。



アレクセイ・ゲラシメズ
（パーカッション）
Alexej Gerassimez

1987年ドイツ生まれ。ミュンヘン国際コンクールなど多数の受賞歴を持つ。多様な音楽様式を組み合わせ、クラシックから現代作品、ジャズ、ミニマル音楽をレパートリーとし、作曲家としても活躍。世界的オーケストラ、アルブレヒト、タバシュニク、タン・ドゥンなどの指揮者と共演、音楽祭等にも多数出演。イギリス・バーミンガム音楽大学、ザルツブルク・モーツァルテウム大学等のほか、2017年11月よりミュンヘン音楽大学教授。現在ベルリン在住。

チケット販売中

アレクセイ・ゲラシメズ パーカッション・リサイタル

11.4(日)15:00 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

【曲目】アレクセイ・ゲラシメズ：アスヴェンチュラス
アレクセイ・ゲラシメズ：スピラトン（日本初演）
ハビエル・アルバレス：マラカスとテープのための“テマスカル”
マーク・グレントワース：ブルース・フォー・ギルバート
ネボジャ・ジヴコヴィッチ：イリヤージュ
アレクセイ・ゲラシメズ：ソウル・オブ・ボトル（日本初演）
アレクセイ・ゲラシメズ：エラウィ（日本初演）
ケーシー・カンジェローシ：バッド・タッチ
ヤニス・クセナキス：ルボンB

※「アスヴェンチュラス」の実演を交えてのアフター・トーク開催！

チケット（税込）全席自由 一般3,300円
U-25* 2,000円／メンバーズ3,000円

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

——打楽器奏者は、いわゆる「楽器」だけでなく、時には音楽と全く関係ない「道具」も楽器として演奏なさいます。打楽器を演奏するとき、最も大事にしていることは何でしょう。

奏でるものが打楽器であろうとなかろうと、私は気にしていません。大切なのはその音色です。私が音楽で何を伝えたいか。それを表現するための音色が、私にとって大切なのです。

——日本にも固有の打楽器がありますが、興味のある日本の楽器はありますか。

私は日本の太鼓の大ファンなんです。昨年ハンブルクで、テレビ番組の中で日本の太鼓演奏グループと共演しました。日本の伝統的な太鼓奏者は強烈でエネルギッシュで、とても好きです。

また、日本の楽器ではなく演奏家ですが、安倍圭子さんをととても尊敬しています。彼女はマリンバ奏者として世界で最初に有名になった人です。私は彼女の作品もたくさん演奏しています。

11月のリサイタルは 貴方の知らない世界が待っている！

——11月のリサイタルでは、ご自身の作品やクセナキスの作品などを演奏されます。スネア、マリンバ、ヴィブラフォンなどの

ソロだけでなく、多彩な音世界を楽しめるプログラムとのことで、とても楽しみです。どのような思いで選曲されたのでしょうか。

打楽器の音色と表現の可能性は無限です。私は、打楽器のそんなところが大好きなので、今回のプログラムは、打楽器がさまざまな方向性を持つことを、演奏会で体験していただきたいです。みなさんの知らない世界を、ぜひお楽しみください。

——演奏活動の中で大切にしていることは？

音楽の時を大切にすること、その美しさを作り出すことを常に大切にしています。世界は今、物事が目まぐるしく進み、感情や娯楽にあふれ、私たちの意識はすぐに行き場をなくしてしまいます。音楽は、私たちと時間とを繋ぐ素晴らしい方法のひとつだと思っています。

——今回がゲラシメズさんにとって日本初リサイタルとなります。日本のお客様へメッセージをお願いします。

日本で演奏できることを、とても光栄に思っています。ステージに立ち、みなさんと音楽を共有するのがとても楽しみです。また、魅力ある日本文化についても、滞在中にできる限り知りたいと思っています。みなさん、彩の国でお会いしましょう！

クリスマス期間の6回の礼拝のための 6部からなるキリスト降誕物語

日本では11月を迎えると街はクリスマスの装飾で彩られ、イヴに盛り上がりのピークを迎える。一方、教会暦ではクリスマスは12月25日から始まり、それに先立つ4週間は「待降節」と呼ばれている。

バッハが《クリスマス・オラトリオ》を作曲した当時のライプツィヒでは、待降節の第2日曜日以降は悔い改めの期間として、オルガンを除く歌舞音楽が禁じられていた。それに対し、降誕日と定められた

12月25日からの3日間は「降誕節」の祝日として礼拝が執り行われ、音楽が奏でられた。以後、キリストの命名と割礼の記念日である元日を経て、星を頼りにキリストの居場所を探し当てた東方の三博士による礼拝をもってキリストの公現とみなして記念する1月6日の「^{エピファニー}顕現節」までの13日間、すなわち「十二夜」がクリスマス期間である(2月2日の「マリア潔めの祝日」までを区切りとする場合もある)。

《クリスマス・オラトリオ》が初演された1734～35年は1月2日が日曜日だったので、この期間の祝祭日は計6日だった

ことになる。その各日に演奏するカンタータを、バッハはひとまとめに構想したようだ。というのも、本作を構成する6部は、それぞれが独立したカンタータであると同時に、全曲を通すと一続きのキリスト降誕物語になるだけでなく、音楽的にも二長調を中心とした調性で構成されているからだ。

歌詞台本は、第1～4部が「ルカによる福音書」第2章第1～21節、第5・6部が「マタイによる福音書」第2章第1～12節に依っている。つまり、「バツレヘムの馬小屋でのキリスト誕生」「野宿する羊飼いの

たちへの、天使によるキリスト誕生の知らせ」「羊飼いたちのキリスト詣で」「イエス命名」「東方の博士たちのエルサレム訪問」「博士たちの礼拝」を各部の題材としている。また、バッハの受難曲と同様、テノールが福音書記者役を担っており、叙唱で聖書の言葉を歌って物語を進めてゆく。

それにしても、13日間のうちに6曲の新作上演とは、なんというハードワーク！それを可能にしたのは、待降節にカンタータを演奏しないことで生まれた時間的な余裕だけではないだろう。ひょっとしたらバッハは、用意周到にこの大作を準備していたのではないか。

曲をリサイクル?! エコな作曲家バッハ

《クリスマス・オラトリオ》は「パロディ」の代表作として知られている。パロディとは、既存曲を新しい歌詞に合わせて改作する手法、およびそのようにして作曲された作品のこと。バッハは1723年のトーマス・カントル兼ライプツィヒ市音楽監督就任以来、様々な障害にぶつかりながらも理想的な演奏を目指して、市や勤務先のトーマス学校長らと対立し続けていた。しかし、なかなか理解は得られず、数々の敗北を味わう。そこで、1730年頃から彼は、

ザクセン選帝侯宮廷があったドレスデンに目を向け、官職を得ようと、選帝侯一家の慶事に祝賀カンタータを作曲する。《ミサ曲 口短調》の第1部が選帝侯に献呈されたのも1733年のことだ。

ただし、選帝侯への表敬や選帝侯妃の誕生日のお祝いといった目的で書かれたものは、その性格上、どんなに力作であってもそのままでは再演するわけにいかない。改作して新たな命を吹き込もうと思うのは、当然だろう。バッハは《われら心を配り、しかと見守らん》BWV 213と《とどろけ太鼓、高鳴れラッパ》BWV 214の祝賀カンタータから3曲の合唱曲と7曲のアリアを《クリスマス・オラトリオ》の第1～4部で転用している。その他、消失した《マルコ受難曲》など少なくとも4曲から改作されたと考えられている。そのような背景を知ってなお、《クリスマス・オラトリオ》は降誕節にふさわしい雰囲気をもち、歌詞と見事に合致した音楽であると感じられるに違いない。それは、バッハの見事な手腕がなせる業であると同時に、そもそも降誕節用に改作することを念頭に祝賀カンタータを作曲するような計画性あってこそ、かもしれない。現代では、かつては一回性の作品であった祝賀カンタータも演奏会や録音で聴くことができるので、興味のある方

*

ところで、バッハ・コレギウム・ジャパンは1998年(20年前！)に彩の国で《クリスマス・オラトリオ》を録音しているが、当劇場公演で本作を採り上げるのは初めて。恒例のBCJ音楽監督、鈴木雅明氏による作品解説レクチャーが今回も予定されているので、ぜひ、早目にエントリーして公演と併せてお聴きになることをお勧めしたい。



バッハ・コレギウム・ジャパン J. S. バッハ 《クリスマス・オラトリオ》

バッハが描くクリスマスの物語

“クリスマスの歌”といわれて思い浮かべる曲は？
「きよしこの夜」に「ジングル・ベル」、ポップスの定番曲もいろいろ。
でも、音楽ファンが忘れてはならないのは《クリスマス・オラトリオ》。
ドイツ・ライプツィヒの音楽監督として、日々の礼拝のための音楽を作曲していたヨハン・ゼバスティアン・バッハが、クリスマスの礼拝用に作曲した作品だ。
彩の国さいたま芸術劇場では、クリスマスを先取りして11月、日本が誇る世界的古楽アンサンブル、バッハ・コレギウム・ジャパンが演奏する。
《クリスマス・オラトリオ》がどのような作品かご紹介しよう。

文 ● 遠藤れな



鈴木雅明
(指揮)



ハナ・ブラシコヴァ
(ソプラノ)



クリント・ファン・デア・リンデ
(アルト)



ザッカリー・ワイルダー
(テノール)



クリスティアン・イムラー
(バス)

チケット販売中

バッハ・コレギウム・ジャパン

J. S. バッハ《クリスマス・オラトリオ》全曲

11.24(土) 15:00 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

【出演】鈴木雅明(指揮)、ハナ・ブラシコヴァ(ソプラノ)、クリント・ファン・デア・リンデ(アルト)、ザッカリー・ワイルダー(テノール)、クリスティアン・イムラー(バス)、バッハ・コレギウム・ジャパン
【曲目】J. S. バッハ:《クリスマス・オラトリオ》BWV 248 全曲

チケット(税込) 一般 正面席8,500円 / メンバーズ 正面席7,700円

※バルコニー席・U-25は予定枚数終了

【公演関連企画】

BCJ音楽監督 鈴木雅明による作品解説レクチャー開催!

11.17(土) 15:00開講(14:30受付開始/90分程度の予定)

彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

【参加費】1,000円 ※11/24の公演チケットをお持ちの方は無料

【申込方法】メールまたは往復はがき(往信面)に下記事項を記入のうえお申し込みください。※定員(150名)に達した場合には、お申込受付を締め切ります。

①氏名 ②郵便番号・住所 ③電話番号 ④メールアドレス ⑤公演チケット購入者は座席番号

●郵便 往復はがき

〒338-8506 埼玉県さいたま市中央区上峰3-15-1

彩の国さいたま芸術劇場「BCJ 11/17レクチャー」係

●MAIL music@saf.or.jp

件名に「BCJ 11/17レクチャー申込み」とご記載ください。

【お問合わせ】彩の国さいたま芸術劇場(音楽担当) 048-858-5506



彩の国シェイクスピア講座 Vol. 2

『ヘンリー五世』徹底勉強会 受講者募集

コーディネーター：河合祥一郎

シェイクスピアの作品をさまざまな角度から掘り下げ、新しい魅力を発見する『彩の国シェイクスピア講座』。Vol. 2は、来年2月に開幕する『ヘンリー五世』を取り上げます！本作は、『リチャード二世』、『ヘンリー四世第1部、第2部』に続く歴史劇四部作の最終作。他の作品を知らない方もより深く楽しめること間違いなし！1回からでも受講できます。ぜひご参加ください。

《第1回》11月10日(土)

「ヘンリー四世と六世の狭間で」

講師：河合祥一郎(東京大学教授)

《第2回》11月24日(土)

「知らないようで慣れ親しんでいる『ヘンリー五世』の世界～影響と受容」

講師：北村紗衣(武蔵大学准教授)

《第3回》12月1日(土)

「『ヘンリー五世』とロンドン市民の英雄像」

講師：井出新(日本シェイクスピア協会会長)

《第4回》2019年1月14日(月・祝)

「『ヘンリー五世』のラスト・シーン～キャサリン像を考える～」

講師：米谷郁子(清泉女子大学准教授)

《第5回》2019年2月3日(日)

「『ヘンリー五世』翻訳こぼれ話」

講師：松岡和子(翻訳家)

進行：河合祥一郎(東京大学教授)



彩の国シェイクスピア講座 Vol.1の様子 講師：河合祥一郎

【講師プロフィール】

河合祥一郎(かわい・しょういちろう)

彩の国さいたま芸術劇場シェイクスピア企画委員会委員長。東京大学教授。角川文庫からシェイクスピア戯曲の新訳を刊行するほか著書多数。主著に『ハムレットは太っていた!』(白水社、サントリー学芸賞受賞)など。蜷川幸雄演出『ヘンリー四世』『ヘンリー六世』の構成も手掛けた。

北村紗衣(きたむら・さえ)

武蔵大学人文学部英語英米文化学科准教授。著書に『シェイクスピア劇を楽しんだ女性たち—近世の観劇と読書』(白水社、2018、単著)、キャトリン・モラン『女になる方法—ロックンロールな13歳のフェミニスト成長記』(青土社、2018、訳書)などがある。

井出新(い・あらた)

慶應義塾大学文学部教授。専門は英文学、イギリス初期近代の演劇と文化。日本シェイクスピア協会会長。著書としてThe Cambridge Guide to the Worlds of Shakespeare (Cambridge Univ. Pr.、共著)や『シェイクスピア大全』(新潮社、共編)、『シェイクスピアはどこ?—お芝居の中に隠れているよ』(東京美術、監修絵本)など多数刊行している。

米谷郁子(こめたに・いくこ)

清泉女子大学文学部准教授。専門はシェイクスピアをはじめとする初期近代英国文学、その後世における校訂・受容・翻案研究。共著に『甦るシェイクスピア』、編著に『今を生きるシェイクスピア—アダプテーションと文化理解からの入門』(ともに研究社)など。

松岡和子(まつおか・かずこ)

彩の国さいたま芸術劇場シェイクスピア企画委員会委員。翻訳家、演劇評論家。彩の国シェイクスピア・シリーズの翻訳を担当。ちくま文庫から『シェイクスピア全集』を刊行中、既刊34作。主著に『深読みシェイクスピア』(新潮文庫)などがある。

チケット発売日 一般 10.21(日) メンバーズ 10.20(土)

《第1回》11月10日(土)、《第2回》11月24日(土)、《第3回》12月1日(土)、
《第4回》2019年1月14日(月・祝)、《第5回》2019年2月3日(日)

[時間]14:00～16:00 ※各回13:30から開場

[会場]彩の国さいたま芸術劇場 映像ホール

チケット[参加費](税込) 全席自由 一般・メンバーズ1回券1,000円、通し券4,000円
U-25* 1回券500円、通し券2,000円

※開場時間より先着順でのご入場となります。

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。



Photo © 加藤英弘



Photo © 加藤英弘

参加者募集!

彩の国さいたま芸術劇場 「劇場体験ツアー」

劇場には客席からは見ることができない、たくさんの仕掛けが
つまっています。ツアーでは、普段は入ることのできない舞台の
裏側や、奈落と呼ばれる劇場の地下に皆さんをご案内します。ス
タッフが明かりや効果音を操作する様子をのぞいたり、出演者
が準備をする楽屋を訪問したり、彩の国さいたま芸術劇場の大
ホールの舞台裏をくまなく冒険します。驚きいっぱいの劇場を
親子で一緒に体験できる「劇場体験ツアー」で、新たな「劇場の
魅力」を発見してみませんか?

[日時]12月23日(日・祝)～26日(水) 各日11:00/13:30/15:30(4日間計12回開催)

※開場は各回ともにツアー開始の20分前 ※ツアーは1 時間程度を予定

[会場]彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

[対象]小学生とその保護者 ※未就学児童のご参加はご遠慮いただいております(有料託児サービスあり)。

※親子で一緒にお楽しみいただくツアーです。高学年のお子さまの場合でも、できるだけ保護者の方が一緒にご参加ください。

[定員]各回30名(応募多数の場合は抽選)

[料金]300円(子ども・大人共通/保険料込み) ※当日受付にてお支払いください。

[申込方法]申込用紙(財団ホームページ<http://www.saf.or.jp/>からダウンロード)に必要事項を
ご記入の上、FAXまたはご郵送いただくか、彩の国さいたま芸術劇場窓口にてお申込みください。
当選者への参加証の発送をもって抽選結果の発表にかえさせていただきます(12月上旬予定)。

[申込期間]11月1日(木)～24日(土)必着

[申込先]〒338-8506 埼玉県さいたま市中央区上峰3-15-1

彩の国さいたま芸術劇場「劇場体験ツアー」係 FAX.048-858-5515

[お問合わせ]彩の国さいたま芸術劇場 TEL.048-858-5500(休館日を除く10:00～19:00)



Photo © Arnold Groeschel

DANCE

伊藤郁女

『私は言葉を信じないので踊る』

7.21(土)・22(日) 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

出演者は実の父娘——ヨーロッパを拠点に活躍するダンサー・振付家の伊藤郁女が、彫刻家の父とのユニークな対話をダンスとして構成した作品。開演前から舞台上には父と彫刻がたたずみ、場内には録音された娘からの質問が流れ、観客は緩やかにこの二人の空間に誘われる。幼き日の思い出、哲学的な問い、芸術的な葛藤、思い出の歌、父と娘が歩んできたそれぞれの人生……ヨーロッパと日本、離れて暮らす距離と失った時間を埋めるように展開され、浮かび上がる家族の肖像は、時にほほえましく、時に生々しい。再び出会い直すような二人の貴重な時間に、居合わせてもらえたような感動があった。



Photo © 引地信彦

PLAY

オックスフォード大学演劇協会 来日公演

『十二夜』

8.5(日) 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

歴史ある名門オックスフォード大学の学生劇団による生きのいいシェイクスピア作品がやって来た。男女取り違えの大混乱、もつれる恋模様、思い込みや段取り違い……美術はモンドリアン風、舞台を60年代のスウィング・ロンドンに設定し、人気喜劇をカラフル&ポップでスピーディーな恋愛コメディにアレンジ。男装するヒロイン、ヴァイオラに思いを寄せる伯爵令嬢のオリヴィアは、出てくるたびに衣裳を変え、ファッショナブル! 侍女や召使いたちは、スラップスティックな演技でさらに喜劇を加速させる。女性が演じる道化フェステは現代的で、外からこの狂騒的な世界を見るようで印象的だった。

REVIEW

レビュー



Photo © 加藤英弘

MUSIC

埼玉会館ファミリー・クラシック

夏休みオーケストランド!

7.28(土) 埼玉会館 大ホール

夏休み恒例、飯森範親の指揮、朝岡聡の司会、東京交響楽団による“オーケストラの国”の演奏会。《コッペリア》組曲より澁刺とした〈マズルカ〉で始まり、《ディズニーのメロディーによる管弦楽入門》で楽器の編成と音に注目したあと、小学5年の村田夏帆さんがソリストとして登場。分数量器ながら深い情感に満ちた響きでチャイコフスキーの音楽を歌い上げた。「指揮者にチャレンジ!」では子どもたちの個性あふれる指揮に拍手喝采。「みんなで歌おう・演奏しよう!」では舞台に乗りきれないほど大勢の子どもたちがオーケストラとの共演を楽しみ、最後は《ウィリアム・テル》序曲の心躍るリズムとサウンドに目を輝かせていた。



Photo © 加藤英弘

MUSIC

大塚直哉レクチャー・コンサート

J. S. バッハ “平均律クラヴィーア”の魅力

～ポジティブ・オルガン VS チェンバロ その1～

9.2(日) 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

ポジティブ・オルガンの演奏とトークを音楽ホールで聴く「大塚直哉レクチャー・コンサート」。第2弾の今年はJ.S. バッハ《平均律クラヴィーア曲集 第1巻》の前半12曲を取り上げ、しかも第10番まではオルガンとチェンバロの演奏を聴き比べるという贅沢な企画に客席は大盛況。音が持続するオルガン、しないチェンバロ、それぞれの特性による味わいの違いは興味深く、特にオルガンによる同曲の響きが新鮮だった。《平均律～》は何のために作曲されたのか不明な作品だが、大塚のトークを聞くとバッハの意図が見えてくるような、想像がかきたてられる3時間のレクチャー・コンサート。今回の続きをやるという来年が楽しみだ。

MUSIC

販売中

ピアノ・エトワール・シリーズVol.35

ダニエル・シュエ ピアノ・リサイタル

10.28(日)15:00 音楽ホール

[曲目]

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第31番 変イ長調 作品110

J. S. バッハ（ブゾーニ編曲）：シャコンヌ

ショパン：3つのマズルカ 作品56

シューマン：アラベスク ハ長調 作品18

シューマン：幻想曲 ハ長調 作品17

チケット(税込) 一般 正面席 3,500円 バルコニー席 2,500円

U-25* (バルコニー席対象) 1,000円 メンバース 正面席 3,200円

※バルコニー席・U-25は残席僅少

販売中

アレクセイ・ゲラシメス

パーカッション・リサイタル

☎ 詳細はP.14-15

販売中

バッハ・コレギウム・ジャパン

J. S. バッハ《クリスマス・オラトリオ》全曲

☎ 詳細はP.16-17

販売中

埼玉会館ランチタイム・コンサート第37回

トルヴェール・クワルテット (サクソフォン四重奏)

with 小柳美奈子 (ピアノ)

12.7(金) 12:10(終了予定13:00)

埼玉会館 大ホール

[出演] 須川展也 (ソプラノ・サクソフォン)、

彦坂眞一郎 (アルト・サクソフォン)、神保佳祐 (テナー・サクソフォン)、

田中靖人 (バリトン・サクソフォン)、小柳美奈子 (ピアノ)

[曲目] J. S. バッハ (須川展也編曲)：G線上のアリア

いずみたく (石川亮太編曲)：見上げてごらん夜の星を

石川亮太：ナポリ! ナポリ! ナポリ! ほか

チケット(税込) 全席指定 1,000円

販売中

ピアノ・エトワール・シリーズVol.36

レミ・ジュニエ ピアノ・リサイタル

2019年1.12(土) 15:00 音楽ホール

[曲目]

J. S. バッハ：カプリッチョ「最愛の兄の旅立ちに寄せて」 BWV 992

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第23番 へ短調 作品57「熱情」

ショパン：4つのマズルカ 作品17

ストラヴィンスキー：「ベートル・シュカ」からの3楽章

チケット(税込) 一般 正面席 3,500円 バルコニー席 2,500円

U-25* (バルコニー席対象) 1,000円 メンバース 正面席 3,200円

販売中

※残席僅少

オルガン・レクチャー (演奏付)

ポジティブ・オルガン+α (アルファ) アンサンブルの楽しみ

ヴァイオリンと奏でるロマンティックなバロック!?

2019年1.20(日) 13:00

彩の国さいたま芸術劇場 大練習室

[出演] 大塚直哉 (オルガン・講師)、島田真千子 (ヴァイオリン)

[曲目] ジャゾット：アルビノーニのアダージョ

ヴィタリ：シャコンヌ ほか

チケット(税込) 全席自由 1,000円

※当初発表した開講時間(14:00)が13:00に変更となりました。

ご了承くださいませようお願いいたします。

販売中

アリーナ・イブラギモヴァ&セドリック・ティベルギアン

デュオ・リサイタル

2019年2.17(日) 15:00 音楽ホール

[出演] アリーナ・イブラギモヴァ (ヴァイオリン)、

セドリック・ティベルギアン (ピアノ)

[曲目] ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第3番 作品12-3

ヤナーチェク：ヴァイオリン・ソナタ

ケージ：6つのメロディ

シューマン：ヴァイオリン・ソナタ 第2番 作品121

チケット(税込) 一般 正面席 5,500円 バルコニー席 4,500円

U-25* (バルコニー席対象) 2,000円 メンバース 正面席 5,000円

販売中

彩の国さいたま芸術劇場シリーズ企画

「次代へ伝えたい名曲」第14回

清水和音 ピアノ・リサイタル

2019年2.24(日) 15:00 音楽ホール

[曲目] シューマン：こどもの情景 作品15

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第30番 ホ短調 作品109

尾高惇忠：ピアノのためのバラード 第1番

リスト：ピアノ・ソナタ 短調

チケット(税込) 一般 正面席 4,000円 バルコニー席 3,000円

U-25* (バルコニー席対象) 1,500円 メンバース 正面席 3,600円

※12月16日(日)関連企画あり(要事前申込み)

☎ 詳細はP.23

発売日 一般 11.24(土) メンバース 11.18(日)

バッハ・コレギウム・ジャパン

J. S. バッハ《マタイ受難曲》

2019年4.13(土) 15:00 音楽ホール

[出演] 鈴木雅明 (指揮) ほか

チケット(税込) 一般 正面席 9,000円 バルコニー席 8,000円

U-25* (バルコニー席対象) 3,000円 メンバース 正面席 8,100円

※関連レクチャー開催予定

発売日 一般 12.2(日) メンバース 12.1(土)

埼玉会館ランチタイム・コンサート第38回

東京交響楽団メンバーによる金管五重奏

2019年3.13(水) 12:10(終了予定13:00)

埼玉会館 大ホール

チケット(税込) 全席指定 1,000円

※詳細は次号に掲載します。

EVENT

発売日 一般 10.21(日) メンバース 10.20(土)

彩の国シェイクスピア講座Vol. 2

『ヘンリー五世』徹底勉強会

☎ 詳細はP.18

FESTIVAL

販売中

《世界ゴールド祭2018》【演劇】

ゴールド・アーツ・クラブ × ノゾエ征爾

『病は気から』

10.3(水)～8(月・祝) 大ホール

10月 3 4 5 6 7 8
水 木 金 土 日 月・祝

15:00 月 太陽 月 太陽 月 太陽

[原作] モリエール (臨川書店刊「モリエール全集」秋山伸子訳より)

[脚本・演出] ノゾエ征爾 (脚本家・演出家・俳優・はえぎま主宰)

[出演] ゴールド・アーツ・クラブ ほか

[上演時間] 約2時間 (予定)

チケット(税込) S席 2,500円 A席 2,000円

※ゴールド・アーツ・クラブが太陽組、月組の2組に分かれて、1日1回交互に公演を行います。

※上演項目は太陽組・月組とも同じです。

販売中

《世界ゴールド祭2018》【演劇】

クローワーズ・ドラマ・グループ

『カンボン・チュンプダ (チュンプダの村)』

10.4(木)19:00、5(金)・6(土)15:00 小ホール

[上演時間] 約1時間 ※終演後、アーティストトークを行います。

チケット(税込) 全席自由 2,500円

※中国語・英語・マレー語・タミル語での上演 (日本語・英語字幕付き)。

チケット購入方法

インターネット

埼玉県芸術文化振興財団
オンラインチケットSAF オンラインチケット
で、発売初日 10:00 から
公演前日 23:59 まで
受付いたします。

【PC・携帯共通】

http://www.ticket.ne.jp/saf/

メンバーズ

登録のご住所へ無料配送

一般

【クレジットカード決済】

または【コンビニ支払い】

▶ コンビニ発券

※チケット代の他に、店頭発券手数料(チケット1枚につき120円)が必要です。

電話予約

チケットセンター 0570-064-939

10:00～19:00 (彩の国さいたま芸術劇場休館日を除く)

※一部の携帯電話、PHS、IP 電話からは受付できません。

メンバーズ

登録のご住所へ無料配送

一般

【クレジットカード決済】

または【コンビニ支払い】

▶ コンビニ発券

※チケット代の他に、店頭発券手数料(チケット1枚につき120円)が必要です。
※コンビニ支払い後にチケット配送も承りますが、チケット代のほかに配送料
(配送1件につき400円)が必要です。

窓口販売

彩の国さいたま芸術劇場・埼玉会館窓口 (10:00～19:00)

で直接購入いただけます。電話予約したチケットの

引取もできます (メンバーズは登録のご住所への配送となります)。

※休館日をお確かめの上、ご来場ください。

メンバーズ

【口座引落】

一般

【現金】または

【クレジットカード決済】

その場で
チケットを
お渡します。
※手数料は
かかりません。

『源氏語り五十四帖』

(彩の国さいたま芸術劇場収録)

オーディオブック配信・CD-R販売開始!

『源氏語り五十四帖』は彩の国さいたま芸術劇場が2001年より9年がかりで、五十四帖全作品をとりあげて好評を博した公演の貴重な記録です。難解な古典文学をわかりやすく、身近な出来事のように読み解く三田村雅子先生の解説。そして紫式部の名文を表情豊かに〈生きた古典のことば〉で伝える幸田弘子さんの朗読。平安ロマン溢れる『源氏物語』の世界が、現代にいきいきと舞台の臨場感そのままに蘇ります。

『源氏語り五十四帖』

[作] 紫式部

[解説] 三田村雅子 (国文学者・フェリス女学院大学名誉教授)

[朗読] 幸田弘子 (女優・舞台朗読家)

[収録] 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

(2001年6月～2010年3月)

●オーディオブック配信

[URL] https://audiobook.jp/

[配信日] 2018年9月より随時配信開始、毎月第2・第4

水曜日更新

第1回配信「桐壺」、第2回配信「雨夜の品定め」配信中

[価格] 1公演：1,500円(税抜) ※公演時配布のテキスト付

【ご利用方法に関するお問合わせ】株式会社オトバンク

audiobook.jp 運営事務局 MAIL：info@febe.jp

TEL：03-5805-2915 (平日10:00～20:00)

●CD-R

CD-Rをご希望の皆さまには、オーディオブック配信音声
を1セット2公演 (CD-R4枚) 3,500円(税抜) +送料
+代引き手数料 (公演時配布のテキスト付) にてお届け
いたします。お得な定期購入もございます。

【お問合わせ】株式会社ジェー・ピー

TEL：0120-366-004 (平日10:00～17:00)

FAX：03-6264-2502



解説：三田村雅子



朗読：幸田弘子

Photo◎浅野いずみ

【観覧募集】

埼玉伝統芸能フェスティバル

～伝えたい 埼玉の神楽と車人形～

県内各地域に受け継がれている特色ある伝統芸能を御紹介します。全国でも数少ない車人形、秩父吉田に伝承されている神楽、オープニングには、坂戸市の子どもたちによる「塚越ばやし」をご覧いただきます。どうぞお楽しみに! (入場無料)

[日時] 12月16日(日) 開演 13:00 (16:00終演予定)

[会場] 埼玉会館 大ホール

[演目] オープニング「塚越^{つかこし}ばやし」塚越^{つかこし}囃子連 (坂戸市)「小栗判官^{おぐりはん}一代記」竹間^{たけま}沢車人形保存会 (三芳町)「大蛇^{おほへび}攻め」貴布祢神社神楽保存会 (秩父市)

[申込方法]

受付開始 10月15日(月)

締切 11月22日(木) (必着)

メール、はがき、FAX、当課ホームページから電子申請

で受け付けます。1回のお申込みにつき4名様まで可。

①代表者郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・電話番号

②観覧者全員の氏名(ふりがな)・年齢を明記してください。

[定員] 1,300人(自由席)

※応募者多数の場合は抽選を行います。当選されたグループの代表者の方
に12月3日(月)まで入場整理券をお送りします。

[申込先] 〒330-9301 さいたま市浦和区高砂3-15-1

埼玉県文化振興課「伝統芸能フェスティバル」係

FAX：048-830-4752

MAIL：a2875-01@pref.saitama.lg.jp

URL：http://www.pref.saitama.lg.jp/a0305/2018dento.html

主催：埼玉県

共催：(公財) 埼玉県芸術文化振興財団

協力：秩父市 坂戸市 三芳町

【お問合わせ】埼玉県文化振興課 TEL：048-830-2879

(平日8:30～17:15)



竹間沢車人形「小栗判官一代記」

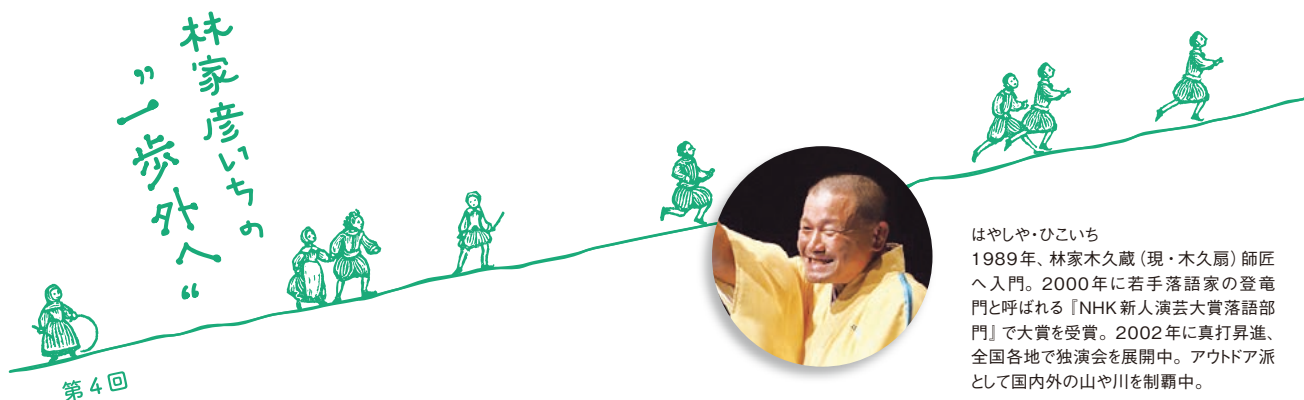
サポーター会員

(公財) 埼玉県芸術文化振興財団は、演劇、ダンス、音楽を中心に、この劇場でしか見られない最高の作品を提供できるよう、作品づくりに努めています。

こうした財団の活動にご理解、ご支援をいただいているのがサポーター会員の皆様方です。(2018.9.15現在／一部未掲載)

㈱与野フードセンター／㈱亀屋／㈱松本商会／㈱香山壽夫建築研究所／埼玉新聞社／埼玉りそな銀行／㈱パシフィックアートセンター
㈱アサヒコミュニケーションズ／FM NACK5／カヤバ システム マシナリー㈱／㈱タムロン／㈱十萬石ふくさや／森平舞台機構㈱
東芝エルティエエンジニアリング㈱／埼玉トヨタ自動車㈱／武蔵野銀行／浦和ロイヤルバインズホテル／アルピーノ村／国際照明㈱／埼玉スバル
㈱佐伯紙工所／㈱太陽商工／㈱しまむら／不動開発㈱／ビストロ やま／埼玉縣信用金庫／㈱栗原運輸／彩の国 S P グループ／㈱ブラネッツ／㈱デサン
セントラル自動車技研㈱／丸美屋食品工業㈱／ポラスグループ／ひがし歯科／埼玉トヨペット㈱／公認会計士 宮原敏夫事務所／㈱埼玉交通
サイデン化学㈱／アイル・コーポレーション㈱／旭ビル管理㈱／ヤマハサウンドシステム㈱／㈱エヌテックサービス／㈱クリーン工房
㈱つばめタクシー／㈱サンワックス／㈱総合舞台／(一財) さいたま住宅検査センター／㈱国大グループホールディングス／オーガスアリーナ㈱
イープラス／六三四堂印刷㈱／(医) 樺會 林整形外科／埼玉県整形外科医会／(医) 山粋會 山崎整形外科／サンケイリビング新聞社／㈱三和広告社
㈱セノン／ショッパー／㈱松尾楽器商会／JA 埼玉県中央会／日本大学芸術学部／㈱川口自動車交通／㈱ホンダカーズ埼玉／ファミリーマートあすまや
㈱杉田電機／丸茂電機㈱／太平ビルサービス㈱さいたま支店／㈱片岡食品／㈱協栄／㈱ヨコハマタイヤジャパン／NTT 東日本 埼玉事業部
㈱平和自動車／光陽オリエントジャパン㈱／さくら Music Office／クワバラ・パンぶキン／東和アークス㈱／テレビ埼玉／日本ビストンリング㈱
金井大道具㈱／国立大学法人 埼玉大学／㈱七越製菓／ビーンズ与野本町／㈱コマーム／㈱原一探偵事務所／川口信用金庫／青木信用金庫／㈱和幸楽器
新日本ハウス㈱／大栄不動産㈱／相川宗一／㈱ハイデイ日高／浦和実業学園中学・高等学校／三井隆司／大和証券㈱／AGS㈱／ウォータースタンド㈱
㈱ワイイーシーソリューションズ／白神久吉／医療法人青木会／むさし証券／三菱UFJモルガン・スタンレー証券㈱／㈱シルバーデントラルラボラトリー
㈱エスポイント／藤信地所㈱／津田工業㈱／㈱積田電業社／ボートピア岡部・栗橋／中央税務会計事務所／㈱東京コーン紙製作所
トヨタカローラ埼玉㈱／放送大学埼玉学習センター／GARO DAYHAPPY／㈱有村紙工／(医) たかだクリニック／SMBC 日興証券㈱／㈱アステック
㈱加藤工業／㈱ジェイコムさいたま

お問合わせ (公財) 埼玉県芸術文化振興財団 サポーター会員担当 TEL.048-858-5507



はやしや・ひこいち

1989年、林家木久蔵（現・木久扇）師匠へ入門。2000年に若手落語家の登竜門と呼ばれる『NHK新人演芸大賞落語部門』で大賞を受賞。2002年に真打昇進、全国各地で独演会を展開中。アウトドア派として国内外の山や川を制覇中。

噺家は 楽屋で何を喋る？

文と写真●林家彦いち

楽屋で演目の決意表明や反省などしている噺家はいない。話すのは、ほぼ落語に関係ない話。緊張感の中これがまた心地よい。

末廣亭昼の部、楽屋へ入る。僕の出番の前の橘家圓太郎師匠が鎮座。大好きな痛快な先輩。「彦いち！」もお僕が竹だったらスパッと割れる呼びかけ。「はいっ」「減量を始めてね」「はい」「食事の前と後にきゅうりを食べるようにしたんだ」「は、はい……」。

あまり聞いたことのないダイエット方法だった。食事をきゅうりにでなく、きゅうりで食事を挟むのだ。なるほど。「オレはこれまで食事の前と後に大好きな『源氏パイ』を食べていたんだ」。新しい情報が止まらない。

どうやら食前後の源氏パイをきゅうりに変えたということである。圓太郎師匠の出番となりこの日の会話終了。

あまりの言葉のパンチに衝撃を受けたのでその日の夜に出演した渋谷ユーロスペースで開催されている「渋谷らくご」で「楽屋っていいでしょ、芸と関係ない話をしてるんですよ」という形のマクラにしてしゃべった。

翌日、末廣亭の楽屋へ入ると、昨日と同じように圓太郎師匠が鎮座。「彦いち！」昨日と同じ時刻、同じ音。「はいっ」「おめえきゅうりの話をしゃべっただろう」。現代は情報が早い。「す、すみません。つい」「減量は内緒なんだ」。深く詫言った。

そして翌日、同じように末廣亭楽屋へ入る。再び「彦い



ダイエットに成功し頬がシュッと……いやすばめた写真をいただく



ち！」。まるで「OK google！」のような正確さ。同じように「はいっ」「昨日オレ渋谷らくご出演あって行ったんだ」「はい」「楽屋に源氏パイがあったんだ」。図らずもである。「なんだい？ あれは」「いや、すみません」。おそろおそろ「あのおその源氏パイは食べたのでしょうか？」「食わねえわけにいかねえだろう」。なんとすてきで優しい先輩なのでしょう。

数週間後、池袋演芸場で「彦いち！」「はいっ」。「オレはきゅうりダイエットで5キロ痩せたんだ」「おめでとうございます」「自分へのご褒美を買ったんだ」「何を？」「源氏パイ一箱だ！」。

噺家として宝物の会話がまたひとつ増えた。



演劇担当 @Play_SAF

舞踊担当 @Dance_SAF

音楽担当 @Music_SAF



Facebook

彩の国さいたま芸術劇場 @saitamaartstheater

埼玉会館 @saitamakaikan



Instagram

埼玉会館 @saitama_kaikan

www.saf.or.jp

埼玉アーツシアター通信 第77号(10月-11月)

平成30年10月1日発行(隔月1日発行)

発行人: 竹内文則

発行: 公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

〒338-8506 さいたま市中央区上峰3-15-1 TEL.048-858-5500